

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 7 日現在

機関番号：13501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02474

研究課題名(和文) 語りの構造化・反復・共話を可能にするナラティブ・リアリティの認知的解明

研究課題名(英文) Exploring Narrative Reality from A Cognitive Linguistic Perspective:
Structuring, Collaboration and Repetition in Narrative

研究代表者

仲本 康一郎 (NAKAMOTO, Koichiro)

山梨大学・大学院総合研究部・准教授

研究者番号：80528935

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、日常的な営為によって生み出される語りと、語り生成する世界に一貫性を求める私たちの心の習慣をナラティブ・リアリティとしてとらえ、人が語ることでいかにしてリアリティを構築しているかを認知的観点から考察した。具体的には、(1) 語り標識によって構造化され、一貫性が生み出されていくこと、(2) 単一の物語が複数の話者によって共話的に語られうること、(3) 同一の物語が反復的に語られることで変容を受け、かつ同一性を保持することに着目し、語りの展開可能性と反復可能性、さらに複数の話者による共話可能性を架橋する潜在的な物語構造の多相的な分析を行った。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research project is to investigate from the cognitive linguistic perspective how people construct realities in narrative by telling stories. When we tell stories to others in everyday life, we seek coherency between narratives and the world created by them. In this study we called this habit of mind "narrative reality" and examined its major aspects focusing on the following three points: (1) narrative markers help organize the structure of stories, providing them the coherency; (2) a single story can be co-constructed dynamically by more than one speaker; (3) a story accepts changes as it is retold repeatedly while retaining its identity. Then, we made a multilateral analysis of the latent structure of narratives that cross-links narrative's expandability and repeatability and the potential of co-construction by multiple speakers.

研究分野：認知言語学

キーワード：語り(narrative) 認知言語学 物語標識 相互行為 反復

1. 研究開始当初の背景

(1) ナラティブ研究の系譜

物語や文章の研究と言えば、これまでも言語学者 Labov を先駆とする体験談による語りの構造[7]をはじめ、機能主義に基づく修辞構造理論 (RST) [8]、文学作品を対象とした Genette の物語言説論[4]、認知心理学の文章理解研究[1]、人工知能における Schank のスクリプト理論[8]など、様々な分野の研究者によって研究が進められてきた。

(2) 先行研究の問題点

しかし、こうした研究では、物語構造は文法構造のように言語使用者による歴史的な所産であるとみなされており、それらがいかなる心のメカニズムによって動的に生み出されているか、また同一の物語が世界観の一貫性を維持しつつ、いかにして多様な言語表現を可能にしているかなどを統一的に考察するものではなかった。

(3) 認知言語学に基づく語りの研究

そこで本研究では、このような研究の経緯に立脚し、新たに認知言語学に基づく語りの研究を展開することにした。認知言語学は、言語を人間の認知活動の反映と見なすアプローチで、近年は語や文といったミクロのレベルを超えたディスコースやナラティブ[2]、さらに文学作品[5]といったマクロの言語活動に関心を向けはじめてきている。

2. 研究の目的

(1) ナラティブの認知言語学

本研究では、人がことばを用いて何らかのまとまりを持った思考や世界を表現する「語り (narrative)」という営みに焦点を置き、個々の語り手が「語る」行為の連鎖によって生み出す物語世界が、なぜそうしたまとまりや一貫性を保持しつつ、多くの変異体を生成しうるのかを、認知言語学のアプローチによって明らかにする。

(2) ナラティブ・リアリティ

本研究では、実際に表出される「語り」とその産物である「物語 (story)」の間を媒介し、物語世界に統一的な現実感を与える潜在的な認知構造が存在すると仮定し、それをナラティブ・リアリティと呼ぶ。このような構造体を仮定することで、「物語」という静的な構造の分析が主であった従来の研究と比して、現実の語り手が発話連鎖を通して物語を紡いでいく動的な「語り」の様態を捉えることができる。

(3) 具体的な研究の方向性

本研究の具体的な方向性としては、() 物語を 構造化 する装置としての物語標識、() 複数の語り手による 共話 を可能にする共同注意と語りの視点、() 語りの 反復 によって生じる語彙選択や発話時間の変化、という3つの観点から、語りと物語を媒介するナラティブ・リアリティの認知機制を解明する。

図1は、ナラティブの生成プロセスを概念的に組織化したものである。左のボックスは、語りが相互に関連する談話セグメントの重層として表わされること、またそれらが物語標識によって構造化されることを表わす。右のボックスは、語りが反復と共話によって変容を受けつつも、一定のまとまりを備えた「物語」として組織化されることを表わす。

そしてこれら語りと物語を切り結ぶのがナラティブ・リアリティである。本研究では、人が物語に与える現実感が、どのような認知機制によって生み出されるのかを、() 認知言語学による物語標識の考察、() 共話実験データに基づく相互行為性の分析、() 大規模コーパスによるリテリングの調査と分析によって実証する。

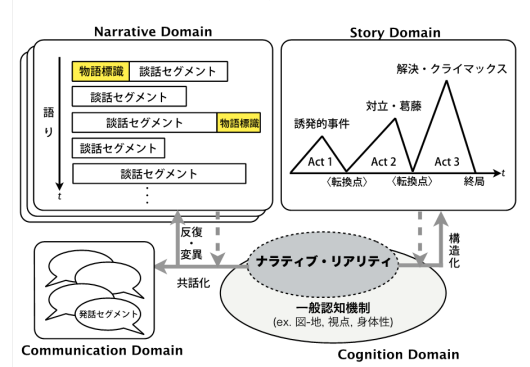


図1. ナラティブ・リアリティの組織図

3. 研究の方法

(1) 語りの構造の理論的考察

代表者仲本は、物語を生み出す心のメカニズムを考察するにあたり、ストーリー展開において個々の行為や出来事がどのように機能するか、あるいはそれらの機能がどう特定化されるかという問題について、特定化を促す物語標識を抽出、整理する。また、物語標識を、() 登場人物の行動や心の動きに言及する意図標識、() 時間軸に沿った物語の展開構造を示す時間標識の二つに区別し、語りにおける物語標識の機能をフレーム意味論[3]の手法を用いて分析する。

(2) 共話実験と定量的分析

分担者岡本はオープンコミュニケーションの観点から、独話(物語形式)から共話(対話形式)への変換を課題として、実験協力者ペアを対象に実験を行い、音声データを収録し、これらを認知語用論の観点から質的に分析する。このときの課題テキストは、学術エッセイ、協力者の体験談の二種類であり、単一の著者によるまとまった知識の提示を二人の実験協力者による対話形式で行うことで、独話に潜む共話的な語りの形式を分析・検証する。

(3) 反復実験と定性的分析

分担者加藤は、共話実験と比較・対照可能な課題として、体験談に基づく語りの反復の様態を知るため、リテリング実験を行う。そのさい、これまでではリテリングにおいて生起

する自立語の事例に関する変化率を定量的に調査してきたが、今回の実験では、語られる物語の一貫性を定性的に記述するため、安定的に用いられる全般的な語彙の分布と、さらに、物語の構造的な同型性や変異についての分析を行う。

下表は、当初提示された研究計画である。

	H27年度	H28年度	H29年度	
仲本 [代表者]	A) 語りの構造化分析			D) 語りの 認知モデル 化
	(i) 物語標識の整理	(ii) 拡大フレーム理論による 物語世界の構造化記述		
岡本 [分担者]	B-1) 共話変換データの 定量分析	B-2) 共話聴取実験と定性分析		
	B) 共話実験による音声データ収録・転記 (w/山口)			
加藤 [分担者]	C) リテリング実験と定性分析		物語スベクトラムの抽出	

今回の研究では、最後のモデル化までは到達できなかったが、代表者仲本は、語りの構造化に関する物語標識の整理と全般的考察を、分担者岡本は、共話実験による音声データの収録とその定性的分析を、分担者加藤は、リテリング実験の定量的、定性的分析を行うことができた。なお、本研究に基づく語りのモデル化に関しては、今後、同一の構成員による研究グループの継続課題として考察を続けていく予定である。

4. 研究成果

(1) 物語標識——物語を構造化する装置

私たちが日常生活で経験する出来事は、感情によって意味づけられる。代表者仲本は、はじめに、語りにおける意味づけの問題を考察するため、日本語の感情表現に注目し、語りにおいて、どのような感情表現が用いられるのか、またそれらが語りのなかで果たす役割について考察した。

具体的には、出来事の意味づけにおいて、喜び、悲しみ、驚き、恐れ、怒りといった感情がどう関わるか、自己と他者が体験する感情はどのように概念化されるか、さらに、感情が自己内で完結するものではなく、他者との関係性のなかでどう規定されるかといった問題を検討した。この成果は雑誌論文として公表された。

また、以上の感情表現の研究を、さらに日本語の形容詞全般に拡張し、形容詞の認知的、機能的な特徴を考察したのが雑誌論文である。動詞が状況を〈出来事〉として概念化するのに対して、形容詞は同様の事態を特定の対象が備える〈属性〉として概念化することを、認知言語学と言語類型論の成果に基づき主張した。

次に、代表者仲本は、語りにおける行為や出来事の意味を記述するためのモデルとして、「物語的意味」という解釈層を設定し、各々の出来事が語り手/登場人物の意図と相対的に、《目標》《機会》《手段》《利益》《被害》《成功》《失敗》として意味づけられることを明らかにした。

また、物語的意味を方向づける要素として「物語標識」を位置づけ、主体の意図の有無や方向性を表わす意図標識、行為や出来事の時間的な展開を表わす時間標識に分類し、その背後で働く認識を心理学で提唱されている「心の理論[6]」によって定式化した。この成果は雑誌論文に掲載されている。

(2) ナラティブの生成と相互行為性

分担者岡本は、まず、ナラティブを潜在的な相互行為が埋め込まれたものと見る立場から、ファシリテーターの響鳴行動、授業場面における生徒の挙手行動、漫才師のツッコミ発話、腹話術師のリスナーシップといった「聞き手行動」に着目し、相互行為的なリアリティが構築される要因について考察した。この成果は学会発表で報告された。

次に、分担者岡本は、落語と漫談の語りから考察を進めた。まず、落語では、マクラから本題へ語りのモードが転換する場面で、言語的な境界が提示されるが、非言語の層では境界が時間的に一致しないことを示し、語りの受け手に対する二重の境界設定が噺家の語りの特徴であることを指摘した。この成果は学会発表で報告された。

また漫談についても、一方的な語りよりも、仮想的な対話場面の再現が頻出することを示し、漫談におけるもうひとりの語り手を仮想的概念として導入した。また仮想的語り手が表層化する際、引用標識の戦略的な脱落が受け手の物語理解に有効な手段となることを解明した。この成果は学会発表で報告された。

次に、分担者岡本は、怪談という語りの場面において、ジェスチャー視点がどう使い分けられるかの分析を行い、加えて、コミュニケーション研究そのものが研究者の間でいかに語られ、その背後にどのようなメカニズムが働いているかを、共有基盤とその更新の観点から分析した。この成果は学会発表で報告された。

さらに、分担者岡本は、ナラティブに不可欠なメタ・コミュニケーションを理論的に再考すべく、Batesonのメタ・コミュニケーション概念や、Goffmanのフレーム概念を認知語用論によって再考し、新たなメタ・コミュニケーション研究の枠組みを示唆する論考を執筆した。この成果は、雑誌論文に掲載されている。

(3) 物語における可変的/不変的要素

分担者加藤は、これまでに収集した独話リテリングと共話データに、言語情報のない映像を用いた作文実験を加え、同じ物語における語彙分布を調査した。また、物語の特徴的な要素を調査するため、文法的要素や表現特徴などが読み手の印象にどう影響を与えるのか、クラウドソーシング実験を用いて調査した。さらに、物語のテーマとして重視される要素についても調査を行った。この成果は

学会発表 で報告された。

次に、分担者加藤は、物語に重要な要素が何であるのかを中心に調査を行った。小説本の帯情報の分析を行い、短文から取得できる物語要素を調査した。また、反対に受け手が帯情報から物語を復元できるのかという調査実験に取り組んだ。さらに、物語の異同における読み手の印象判断の根拠を確かめるため、部分改変テキストを用いた実験を行った。これらの成果は学会発表 で報告された。

最後に、分担者加藤は、これまでに収集した物語作文で用いられた比喻表現に着目し、その産出傾向から、隠喩(メタファー)と直喩(シミリー)が果たす認知的、機能的な違いを、認知言語学の観点から考察した。また、これまでの調査から見えてきた物語の反復における物語構造のバリエーションを見直し、これらをもとに調査結果をまとめた。これらの成果は、学会発表 で報告され、さらに雑誌論文 に掲載された。

(4) 本研究のまとめ

本研究期間全体の総括として、第20回日本語用論学会全国大会で、「認知語用論に基づくナラティブ・リアリティの解明に向けて—語りの構造化・共話・反復から見えること」と題するワークショップを開催した。聴衆からは本研究の意義が概ね好意的に受け入れられ、様々な意見、コメントを受けることができた。なお、今回のワークショップの成果は、本年度公開される予定の同学会大会論文集(Proceedings)に公表されることが決定している。また、本科研は平成30~32年度基盤研究(C)「語りの生成と変容のダイナミズムに関する認知語用論的研究」(研究課題番号:18K00530)として発展的に継承されることになった。

<参考文献>

- [1] 秋田喜代美・久野雅樹(編)2001. 『文章理解の心理学』京都:北大路書房.]
- [2] Dancygier, Barbara. 2012. *The Language of Stories: A Cognitive Approach*. Cambridge: Cambridge University Press.
- [3] Fillmore, Charles J. 1982. Frame Semantics. In: The Linguistic Society of Korea (ed.) *Linguistics in the Morning Calm*, 111-138. Seoul: Hanshin Publishing.
- [4] Genette, G rard. 1972. *Discours du R cit: Essai de M thode*. Paris: Seuil.[花輪光・和泉涼一(訳)1985. 『物語のディスクール:方法論の試み』. 東京:水声社.]
- [5] Harrison, Chloe, Louise Nuttall, Peter Stockwell and Wenjuan Yuan. (eds.) 2014. *Cognitive Grammar in*

Literature. Amsterdam: John Benjamins.

- [6] 子安増生 2000. 『心の理論—心を読む心の科学』東京:岩波書店.
- [7] Labov, William. 1972. The Transformation of Experience in Narrative Syntax. In *Language in the Inner City*. Pennsylvania: University of Pennsylvania Press, 354-396.
- [8] Mann, William. C. and Sandra. Thompson. 1986. Rhetorical structure theory: toward a functional theory of text organization. *Text* 8(3): 243-281.
- [9] Schank, Roger C., and Robert P. Abelson. 1977. *Scripts, Plans, Goals, and Understanding*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.

5. 主な発表論文等

(雑誌論文)(計7件)

仲本 康一郎、認知物語論の試み—変容する語りの意味を求めて、山梨大学国語・国文と国語教育、査読無、22巻、2018、135-149.

仲本 康一郎、形容詞—言語類型論と認知言語学からの眺め、山梨大学教育学部紀要、査読無、25巻、2017、281-292.

仲本 康一郎、日本語の感情表現の諸相、山梨大学国語・国文と国語教育、査読無、21巻、2016、198-211

岡本 雅史、課題達成対話の基盤化を実現する言語・非言語情報の多重指向性、日本語用論学会大会発表論文集、査読無、2017、275-278.

吉川 正人、木本 幸憲、岡本 雅史、佐治 伸郎、理論研究再考—理論・モデルは社会言語科学にどう貢献するか?、社会言語科学、査読無、19(2)巻、2017、87-92、https://doi.org/10.19024/jajls.19.2_87.

岡本 雅史、コミュニケーションの「場」を多層化すること—メタ・コミュニケーション概念の認知語用論的再検討、社会言語科学、査読有、19(1)巻、2016、38-53.

加藤 祥、隠喩と直喩の違いは何か—用例に見る隠喩と直喩の使い分けから、認知言語学研究、査読有、2018、1-22.

(学会発表)(計18件)

仲本 康一郎、物語標識—語りを構造化する装置、第20回日本語用論学会年次大会ワークショップ「認知語用論に基づくナラティブ・リアリティの解明に向けて—語りの構造化・共話・反復から見えること」、2017年.

岡本 雅史、津田 明日香、漫談における仮想的対話の導入—独話の相互行為性の解明に向けて、第41回社会言語科学会

研究大会、2018年。
矢島 のは菜、岡本 雅史、落語におけるマクラから本題への遷移ストラテジー、第41回社会言語科学会、2018年。
岡本 雅史、テキストの対話変換実験に基づくナラティブの共話可能性の検討、第20回日本語用論学会年次大会ワークショップ「認知語用論に基づくナラティブ・リアリティの解明に向けて—語りの構造化・共話・反復から見えること」、2017年。
伊田 史佐、岡本 雅史、怪談の語りにおけるジェスチャー視点の選択、第39回社会言語科学会研究大会、2017年。
岡本 雅史、課題達成対話の基盤化を実現する言語・非言語情報の多重指向性、第19回日本語用論学会年次大会ワークショップ「対話理解と基盤化形成をめぐる—マルチモーダル・インタラクションの多角的研究」、2016年。
岡本 雅史、コミュニケーション研究の「語り方」—共有基盤の構築と更新に基づく対話可能性に向けて、第38回社会言語科学会研究大会ワークショップ「理論研究再考—理論モデルは社会言語学にどう貢献するか?」、2016年。
岡本 雅史、グランドセオリーなきコミュニケーション研究を補完するものは何か?、電子情報通信学会ヒューマンコミュニケーション基礎合同研究会、2016年。
岡本 雅史、インタラクティブ・リアリティ試論—腹話術師のリスナーシップの観察から、電子情報通信学会ヴァーバル・ノンヴァーバル・コミュニケーション研究会10周年年次大会、2016年。
小出 優子、岡本 雅史、教室談話の相互行為的制度化—中学校での授業場面における挙手行動の観察から、第37回社会言語科学会研究大会、2016年。
岡本 雅史、ファシリテーションにおける響鳴—個人内の理解から集団内の共有化へ、第36回社会言語科学会研究大会ワークショップ、2015年。
加藤 祥、浅原 正幸、読み手が共通の認識を得るための情報とその表現、第41回社会言語科学会研究大会、2018年。
加藤 祥、物語の反復に見る物語の可変的要素と根幹要素、第20回日本語用論学会年次大会ワークショップ「認知語用論に基づくナラティブ・リアリティの解明に向けて—語りの構造化・共話・反復から見えること」、2017年。
加藤 祥、物語に重要な要素は何か、第39回社会言語科学会研究大会、2017年。
加藤 祥、浅原 正幸、恋愛小説において物語を特徴づける表現—タイトルと帯に見られる表現分析の試み、第38回社会言語科学会研究大会、2016。
加藤 祥 (Sachi, KATO) “Man becomes a dog.”: The difference between

metaphor and simile in the corpus.、6th UK Cognitive Linguistic Conference、2016年。

加藤 祥、富田あかね、浅原正幸、物語がその物語であるための要素—何が同じであれば同じで何が違えば違うのか、第22回言語処理学会年次大会、2016年。
加藤 祥、同じ話における共通語彙、第36回社会言語科学会研究大会、2015年。

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕(計0件)

○出願状況(計0件)

○取得状況(計0件)

〔その他〕なし

6. 研究組織

(1)研究代表者

仲本 康一郎 (NAKAMOTO, Koichiro)
山梨大学・大学院総合研究部・准教授
研究者番号: 80528935

(2)研究分担者

岡本 雅史 (OKAMOTO, Masashi)
立命館大学・文学部・教授
研究者番号: 30424310

加藤 祥 (KATO, Sachi)
大学共同利用機関法人人間文化研究機構
国立国語研究所・コーパス開発センター・
研究員
研究者番号: 40623004